

教宣 せぶん

「水戸黄門」

国民的時代劇「水戸黄門」を知らない人はいないでしょう。

諸国漫遊の旅に出かける黄門さまご一行は、行く先々で、悪政に苦しむ農民や町民に出くわします。一方の側には、私利私欲にはしる権力者や商人があり、黄門さまは「印籠」の力を示しながら、世直しの旅を続けていくというストーリーです。長寿番組だけに、一件落着までいくつかのお決まりのパターンがあることに気づきます。その数多くあるパターンの中のひとつに、「弱者の側の農民や町民が立ち上がらなければ、黄門さまは決して助けない」というセオリーがあります。マニアックな部分なのでお気づきの方は少ないかもしれませんが、権力者の悪政に、手をこまねいていたり、仕方がないとあきらめていたり、立ち上がろうとしないうちは、黄門さまは決して手を差しのべません。また「さきの副将軍」という身分を最後まで明かさないことからわかるように、黄門さまの「権力」にすがって立ち上がることは許しません。あくまで、虐げられている側が、自分たちの力で、何とかしようとする姿を見極めたうえで、黄門さまは力を貸すのです。

これは私たちのたたかいでも同じことが言えるのではないでしょか。高みの見物を決め込んだり、他力本願に頼っていたり、漁夫の利を狙ったりでは道は拓けません。私たちが自らの要求を実現するために、捨て身の覚悟で、泥臭くたたかって初めて道は拓けます。時の「権力者」と対峙してたたかうということは、それだけ大きなエネルギーを費やすことになり、腹を据えなければなりません。私たちの、そういった自分の力で何とかしようとする姿を、世論や法や客観的な第三者の目という現代版「黄門さま」は、必ずどこかで見ているはず。そして、最後は必ず力を貸してくれるはず。

「水戸黄門」がそうであるように、私たちのたたかいも、正直者がバカを見るシナリオにはなっていません。安心してガンガンたたかきましょう。